

2011ナースウェーブ集会開催

NHKの全国ネットのニュースで放送されました!!

～大震災時の県内の病院の状況を交流。やっぱり看護師は増やさなきゃっ。。病院の縮小や閉鎖、看護師不足では安心・安全のまちづくりはできないと確信!!～

2011ナースウェーブ集会を5月8日水戸のみまつホテルで開催しました。参加者は全体で64人(高校生20人・看護の大学生2人を含む) 日本医労連中央執行委員長の田中千恵子さんに「つくろう、いきいきと働き続けられる職場を～ILO看護条約・夜勤の観点から」と題して講演をして頂きました。

東日本大震災で日本医労連の災害対策本部で陣頭指揮を執った田中さんは「大震災は最も医療崩壊がすすんだ地域でおき、もともと厳しい中で働いていた看護師は24時間体制で奮闘した。全国では看護師不足で、支援を送りたくても送れない状況があった。震災のような非常時は特に公的病院の役割の発揮が求められる。今回も職員はがんばった。住民が安心して暮らすために医療・介護はなくてはならない。復興は国の責任で行わなければならない。」「アメリカは昼夜問わずこの病院でも4:1の看護基準で働く。ILO看護条約を守ることができない日本の医療体制。日本でできないわけではない、やろうとしていないだけである。運動し声を上げることで変化をつくりだすことができる。この数年間の運動の中で、看護師確保法が制定され、看護協会や医師会との共同の形が生まれてきている。看護師はやりがいのある仕事、元気になって退院する患者を見送る時は、大きな喜びを得ることができる。いきいきと働き続けるためにも共にごがんばりましょう」と力強く語りました。



茨城の看護師不足は一向に改善されず、全国で42位の状況です。

県西地域では、筑西市民

病院と県西総合病院の再編が検討されています。公的病院の役割をしっかりと守る形の見直しが必要です。

大震災では、北茨城市民病院と水戸協同病院、

筑西市民病院が老朽化により入院機能を失いました。水戸協同病院の看護師の鈴木さんは、震災当日、入院患者を済生会病院や医療センターなどに転送する時の様子や、医療機器が使用できない中で、患者の手を取り、状態の観察と励ましをする中で看護の原点「手当て」を再認識したことなどを報告しました。城南病院の久米さんはライフラインが復旧するまでの間、透析患者さんの転院を余儀なくされたこと、福島から避難してきた患者さんの受入れ、避難所訪問の様子を報告しました。あの日はどこの病院の看護師も患者さんのためにと、自宅にも帰れず120%の力で奮闘していたと痛感しました。



集会アピールで「この震災を機に、さまざまな面で日本のあり方の見直しが迫られている今、看護師自身が健康で、良い医療・福祉が提供できるよう、先進国の名にふさわしい働き方の実現に向けて、今まで以上に運動をすすみましょう」と全体で確認したあと、水戸駅南口で看護師の増員を求める署名と、東日本大震災の義援金を訴えました。